



発行:群馬歴史資料継承ネットワーク(ぐんま史料ネット)
〒370-1193 群馬県佐波郡玉村町上之手1395-1 群馬県立女子大学群馬学センター 築瀬大輔研究室
電話:0270-65-8511(大学代表) Mail:gunma.siryonet00@mail.com

トピック

「浅間山大噴火から240年」の連携事業について

関 俊明

天明の浅間山噴火が起こった1783年(天明3)から数えて、令和4年は239年目で240回忌の年、そして、本年は240年目の周年の年にあたる。また、十干十二支(じっかんじゅうにし)・干支(えと)でいう「癸卯(みずのとう)」の年の出来事であったことからして、60年で1周する干支は、4廻り目の「癸卯」に因む240年目の年を迎えることになる。

群馬と長野の県境にある浅間山の天明三年噴火は、その被害の受け方によって「浅間焼け」とか「浅間押し」と呼ばれて語り継がれてきている。火口から噴出した軽石や火山灰は、中山道とちょうど降下軸の中心が重なり、広域に被害をもたらす「浅間焼け」というイメージをつくった。また、噴火で発生した土石の流れは北麓に流れ下り、吾妻川に流入し、利根川に合流、伝播した。北麓側、沿岸に甚大な人的被害を出した既存の土砂の動きは「浅間押し」という呼ばれ方をし、火山噴火と災害の実相が呼称で使い分けされ語り継がれる歴史災害である。さらに、天明の飢饉とも絡まり、被害地域の風土を考える上で欠くことができない歴史のうねりをつくることにもなっている。

出来事から、240回忌・240年の周年を迎えるにあたり、関係資料や展示を有する機関で連携を

とりながら企画展や講演会の開催をおこなうのはどうだろうかという案を話すことがあった。周年に合わせて展示の企画を打ち出す機関も多いだろうし、他の機関との展示の重なり調整や情報交換は、来訪者の目線にとっても有効なことだろうという理由づけにもつながった。

火山災害に遭遇し犠牲となった人々への供養の念、また、苦難を強いられた先人たちに対して、時間を越えて向き合える機会は、我々が避けて通れない災害に出くわすときの大事な判断材料につながるだろうという今日的な課題解決にもつながる。そのことを博物館活動から向き合うことができのではないだろうか、という考えに至ったわけで、「浅間山大噴火から240年」に係わる連携事業と銘打った呼びかけに、賛同をいただいた博物館や関係機関の協力で、現在事業が進行中である。

令和4年5月の浅間縄文ミュージアムの展示開始を皮切りに事業が始まり、賛同をいただき集まった情報は、県内外の企画展や見学会等がのべ20機関・講演会22回で、現時点の事業一覧は孺恋郷土資料館のホームページに掲載している。また、複数の館でスタンプラリーもあわせて実施している。

何が連携事業かといわれてもあまり大上段なものがなく、チラシに赤帯で“浅間山大噴火から240年・「天明三年」を語り継ぐ”とデザインしようという点と開催情報を集約して互いに情報交換しようという2点である。どちらも、諸事情で一律に足並みをそろえてという訳には進まないが、それぞれの事情に応じて実施という緩やかな形で進展



『村の小さな博物館のポンペイ展』

中である。言い出しっ屁の筆者に十分な調整力や判断力がなかったことで足らぬことがたくさんあるのだが、関係者間のつながりをもって業務として携われていることに感謝していきたい。

「災害は、後のつながりを生む」という言葉を耳にしたことがあるが、本件では「災害をテーマとして」関係する皆さんとつながる機会をいただけたという成果を感じている。複合的な火山災害でもある「天明三年」の記憶情報は今日広域に分散しているが、「点」ではなく博物館や関連する機関により「面」として、周年を機に取り組みたという解釈をいただければ幸いである。

「やった方がいいだろう・やればいいに決まっている」そんな考えを誰もが持つことがあるだろうが、実行に移すまでのエネルギーは大きなものが求められる。「今なら間に合う」「やるのは今だ」「今やらなければ」という行動立ち上げの原動力が、レスキューと重なるキーワードだったと感じている。

＊

最後に、通信のタイトルの「DARUMA」の達磨

の起源について、付け加えさせてもらいたい。現在高崎市豊岡地区周辺は縁起達磨の産地となっているが、浅間山噴火と飢饉であえぐ農民を救済しようと、少林山達磨寺の9世東嶽和尚が張り子の達磨づくりを伝えたのが始まりといい、現在全国の7割を製造する地元産業の起源が浅間災害だったという話である。天明三年の浅間山噴火の降灰被害が大きかった地として、降灰で農民の生活は苦難を強いられた。少林山住職の発案で、型抜きだるま作りが考案され、副業としてこの地に根付き地元振興に発展、成功をおさめたのが今日の伝統工芸の源流である。

なるほど、達磨づくりは、災害からの「文化財」ならぬ、民の生活を救う「レスキュー」のために生まれた産業育成策であったわけで、ここにも知恵と実行力の結集という重なりがある事に気付かせてもらった。

＊

連携展示に賛同いただいている関係者の皆さんを代表して紹介させていただいたが、脈絡のない紹介文となったことをお許しいただきたい。

レポート

<1>

令和4年度群文協研修会(水損文書復旧に関する講演・ワークショップ)参加記

井坂優斗

2023年(令和5)1月26日(木)午後1時30分～4時40分、群馬県立文書館3階研修室にて群馬県市町村公文書等保存活用連絡協議会主催による令和4年度群文協研修会が開催された。対象は古文書関係業務に携わる群馬県内行政・文化財・歴史資料機関の担当で、筆者は館林市職員立場で参加した。

この研修会では2015年(平成27)に発生し

た茨城県常総市水害の際に行政として公文書復旧を担当した常総市総務部総務課長の倉持敏氏による講演と、技術的な面から復旧作業に携わった林貴史氏（埼玉県白岡市元職員、早期退職して公文書レスキュー専門家となり、常総市には行政文書保全指導員として関わった）による講演・ワークショップが行われた。

倉持氏の講演では常総市水害と水損文書復旧活動の概要が次の通り報告された。

平成27年関東・東北豪雨で常総市内の鬼怒川では堤防決壊等が発生し、市域の約3分の1が浸水した。当時は近年の水害で最大規模の被害と言われた。この水害で文書保管庫も浸水、永年保存の公文書も被害を受け、1634年（寛永11）の検地帳など古文書を含む1万点超の文書が浸水した。被災文書について最初に行動したのは常総市有文書を調査した経験のある郷土史家で、茨城県立歴史館に文書被災状況の確認を強く要請し、それにより茨城県立歴史館と茨城史料ネット関係者が被災地入りして文書被災状況確認をはじめ、さらに茨城史料ネット経由で国立文化財機構国文学研究資料館の青木睦氏（被災資料保存の専門家）へと話が繋がった。歴史館・史料ネット・青木氏らが主導し200名を超える文書レスキューボランティアが組織され、資料レスキューが始まった。常総市は市内での文書復旧体制を整えるために学芸員の雇用、行政文書保全指導員の委嘱などを行い、2019年（平成31）2月まで復旧活動が



【写真】ワークショップの様子

続けられた。資料レスキューは被災文書をすべて搬出し、被災の状況に応じてフロア分けした後、解体→ナンバリング→ドライクリーニング→洗浄（フローティング・ボード法）→乾燥（エア・ストリーム法）という手順で行われた。被災から3年半を経た2019年（平成31）、復元作業が概ね完了したことから作業を休止した。

倉持氏の所感として、被災時に行政は人命優先で文書は二の次にならざるを得ず、そのため自助には限界があり、文書に被害が生じた場合は一刻も早く文書のSOSを広く発することが重要だったという。

続いて林氏による講演・ワークショップが行われた。林氏は文書レスキューの注意点として、被災文書を搬出する際には体制を整えるのを優先すべきであり、体制の整え方に不安があればまずは県内の文書館に相談すると全史料協に話がいくので全史料協に任せて問題ないこと、復旧作業スペースが必要になるが場所に限りがあるときはできる範囲でできるだけやっていくことが重要などということが挙げられた。

ワークショップでは疑似水損文書（フラットファイルに綴られた普通紙の束）が用意され、段ボール乾燥処置と、解体・乾燥（圧縮パック）処置の体験が行われた。段ボール乾燥は①濡れた文書を水から取り出し、ファイルの金具をはずして紙を取る→②紙を1枚ずつ吸水紙で包む→③吸水紙で包んだものを新聞紙で包む→④新聞紙で包んだものを段ボールで挟み、ビニール紐で結んで固定という行程で、圧縮パックは①～③まで段ボール乾燥と同じで、④新聞紙で包んだ状態のものを食品用圧縮パックに入れ、食品用圧縮ポンプで空気を抜き真空パックした状態にするというものであった。

林氏によると、食品用の真空パックは日常的に手に入りやすく、ストックしておいて被災時に文

書乾燥用に有効であり、また、被災地では段ボールや古新聞が多くあるといいが、被災状況によっては新聞が配達されなくなるのである程度はストックしておくといいという。

群馬県も当然水害が起きるので、実際の水害に行政・レスキュー指導の立場から携わった方々による講義・ワークショップはたいへん参考になった。発生直後の対応から復旧体制の構築、さらに復旧の一段落までの流れと、そこに地元の史料ネットがどのように参画したかを知ることができたのは有意義であった。群馬県内でも被災時に行政に頼ってもらえる存在としてぐんま史料ネットを位置づけてもらえるようにする必要性を一層感じ、今後の活動への意識が高まった。

研修会の最後、群馬県立文書館から文書レスキュー用の備品（吸水紙・クロス・ゴム手袋・ガウン・真空パック等）を館でストックし、被災時には県内自治体をサポートできるようにするので早めに相談してほしいと案内された。いざというときに群馬県でも文書館がサポートしてくれるという安心感を得たと同時に、史料ネットとしても文書館や市町村と日ごろから連携を深め、いざという時に備える重要性を改めて認識できた。

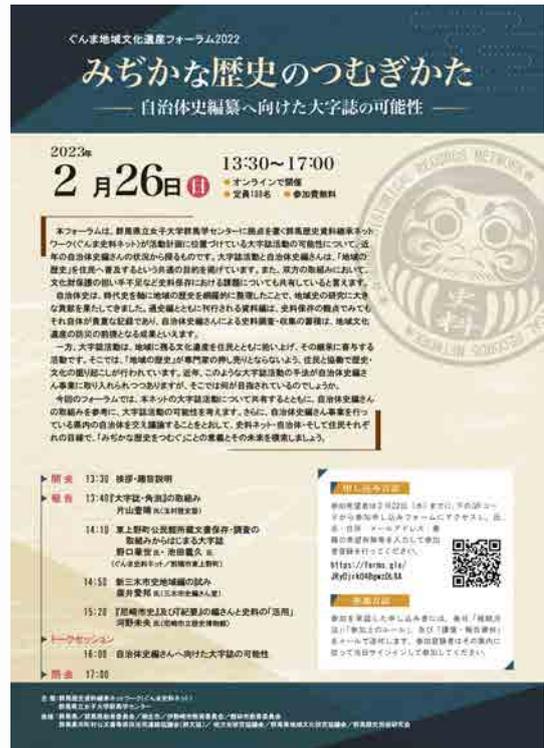
レポート

<2>

ぐんま史料ネット・地域文化遺産フォーラム2022 参加記

高橋人夢

2023年（令和5）2月26日（日）に「ぐんま地域文化遺産フォーラム2022 みちかな歴史のつむぎかた—自治体史編さんへ向けた大字誌の可能性—」がオンラインで開催された。参加した感想について、結論を先に述べれば、自治体史編さんが住民主体のまちづくりにとってこれほど可能



『みちかな歴史のつむぎかた』

性を秘めているものだとは思っていなかったというのが正直なところである。本稿では当日の報告内容とトークセッションの要旨に触れつつ、若干の所感を述べたい。

報告①片山壹晴（玉村歴史塾）「『大字誌・角淵』の取組み」は、2022年（令和4）に刊行された『大字誌・角淵』が生み出された経緯を編集に携わった住民の立場から報告し、本書が誕生した背景を、住民活動（玉村歴史塾）、行政（玉村町教育委員会）、専門家（ぐんま史料ネット）各々のニーズが合致したためとする。

報告②野口華世（ぐんま史料ネット）・池田義久（前橋市東上野町）「東上野町公民館所蔵文書—保存・調査の取り組みからはじまる大字誌—」は、2016年（平成28）に前橋市の東上野町公民館から発見された約1250点の古文書の整理過程を報告し、今後の目標は東上野町らしい『大字誌』を作成するとともに、こうした活動が近隣・周辺地域の歴史の掘り起こしに波及することを期していると締めくくる。

報告③廣井愛邦（三木市史編さん室）「新三木

市史地域編の試み」は、「通史編」に加え、公民館単位からなる10地域ごとの住民参加型の「地域編」を編さんするねらいについて報告し、地域の担い手である住民が学習者やボランティア等として編さんに参加することにより、歴史、文化、伝統を核とした人々の連携を強化することにつながり、自治体史編さんの成果をまちづくりの糧にすることができるという視点を提供する。

報告④河野未央(尼崎市立歴史博物館)「『尼崎市史』及び『紀要』の編さんと史料の「活用」」は、尼崎市立歴史博物館“あまがさきアーカイブズ”が「尼崎市史を読む会」やレファレンス機能、デジタルアーカイブを通して『尼崎市史』の発信拠点になっていることを報告するとともに、市史編さん後も紀要を刊行し続けることにより、現代史を紡ぎ続けることができるという利点を述べる。

トークセッション「～自治体史編さんへ向けた大字誌の可能性～」では、現在、群馬県内で自治体史編さんに取り組んでいる館林市の井坂優斗氏(館林市史編さんセンター)・桐生市の小野里了一氏(桐生市市民生活部市史編さん室)・伊勢崎市の勢藤力氏(伊勢崎市図書館課市史編さん係)がパネラーに加わり、各自治体史の編さん方針や今後の計画が報告された。さらに上記報告者を変え、デジタルアーカイブ、編さんを通じた史料保存の呼びかけの効果等、それらの重要性があらためて認識されるとともに、収蔵庫容量の限界による収集した史料の行き場の問題等、自治体史編さんにつきまとう課題も話題に上った。

以上、当日の要旨を述べたが、いずれの報告においても、自治体史の刊行自体を目的化せず、刊行中から住民を巻き込む活動を活発に重ねること、さらに刊行後も「作りっぱなし」にせず、得られた成果を活用し続けることで「持続可能な」自治体史編さんになり得るといった価値観が共有された。住民主体の歴史叙述と歴史「学」とが如何

ほど整合がとれるものなのか否かについては未だ全く疑問がない訳ではないが、本フォーラムにおける各報告者からの事例報告・提言はいずれも大いに説得力のあるものであった。

筆者は最近、高田雅士『戦後日本の文化運動と歴史叙述』(小さ子社、2022年)に触れ、1950年代の国民的歴史学運動下において、研究者・学生の支援を受けながら地域住民が主体となって活動した城南郷土史研究会が、自らの問題関心や地域的課題に基づき、山城国一揆の共同研究や南山城水害の調査研究を進めながら自治を自覚した経緯を学んだ。本稿の冒頭で述べたとおり、自治体史編さんはまちづくりの観点からも評価できるので、大字誌を含む自治体史編さんは地域社会を見つめ直し、自覚的な地域像を築いていくうえで注目されるべき営為といえよう。誰のための自治体史編さんか、誰のための歴史が書かれるべきか、非常に考えさせられるフォーラムとなった。

会報

 「地域歴史文化の継承」とは『地域歴史文化継承ガイドブック』が、下記「文学通信」のHPで公開されています。ぐんま史料ネットも寄稿しています。<https://bungaku-report.com/blog/2022/03/post-1131.html>

 本誌『DARUMA』の原稿を募集します
 〈発行〉年3～4回程度 〈内容〉史料ネット活動に関する提言、動向、参加記、資料・書籍紹介など 〈分量〉本文1,400字以内(図表1枚程度) 〈形式〉MicrosoftWord 〈提出先〉ぐんま史料ネット事務局までメールで(gunma.siryonet00@gmail.com) 〈締め切り〉随時

 《編集後記》

5月から30℃を超える日がありますが、今年の夏は災害が少ないことを祈念します。(森田)